

発行にあたって

「アッペ・ヘモ・ヘルニア・下肢パリックスの手術」は、雑誌「手術」の臨時増刊号特集として 1995 年 5 月に発行され、以来 20 年にわたってシリーズ化され、若手外科医のみならずベテランの先生からも好評を博してきました。これはひとえに「アッペ・ヘモ・ヘルニア・下肢パリックス」の疾患数、多様性、手技上の興味、そして何と言っても手術の結果が明確にあらわれて、良い結果が患者に「感謝される」手術であることによるものと思われます。

今回、2015 年 3 月に発行された「最新 アッペ・ヘモ・ヘルニア・下肢パリックスの手術（第 3 版）」から 6 年の時を経て、同シリーズの流れを汲む新シリーズとして「消化器・一般外科における Common Disease の手術—エルステから高難度まで」を皆さまにお届けします。本臨時増刊号特集（以下、本特集）では「虫垂炎」「肛門疾患」「鼠径部ヘルニア」に加えて、新たに「胆嚢炎」を取り扱うこととしました。良性胆嚢疾患の標準術式である腹腔鏡下胆嚢摘出術（いわゆるラパコレ）は、年 10 万件以上が施行される唯一の NCD 術式であり（National Clinical Database 年次報告書・2019 年手術症例：11 万 3,341 件）、本特集で取り上げるにふさわしい手術と考えました。

これら 4 つの疾患に対する手術は若手外科医が初めての手術、「エルステ」として行うことが多い手術です。今回、特集の副題として「エルステ（Erste）」という言葉を使いましたが、この言葉は若手外科医には期待と緊張感を、ベテランにとっては外科医としての青春時代を想起させる特別な言葉ではないでしょうか。その一方で、主には腹腔鏡手術などの低侵襲手術の普及に伴い、これらの疾患に対する術式も多様化しています。また、本特集で扱う「Common Disease」には、非常にシンプルな病態に対する難度の低い手術がある一方で、重い病態やまれな病態などの複雑な病態に対する「高難度」の手術が要求される場面も少なくなく、ベテランにとっても常に学ぶことの多い奥の深い疾患であることは、皆さまが日々感じているところではないでしょうか。

本特集では各疾患について、まずは「エルステ手術の心得」から始まり、解剖、古典的手術から state-of-the-art に至るまで、多数のエキスパートの先生に論文をご執筆いただきました。その内容は多岐にわたりますが、とくに若い研修医・修練医の皆さまには、本特集を通じて外科手術の魅力に触れ、日々の臨床に大いにご活用いただければ幸いです。

2021年3月 「手術」編集委員 石原 聡一郎
東京大学腫瘍外科教授